

十勝地方のガン・ハクチョウ類について
城石 一徹（日本野鳥の会オホーツク支部）

北海道の南東部に位置する十勝地方は、内陸に平野部が広がり、北部西部は2,000m級の大雪山系、日高山脈に、また南東部は太平洋に囲まれた地理的環境を有している。農業を主要な産業としている十勝地方では、飼料用トウモロコシや小麦、牧草などの栽培が盛んに行われており、ガン・ハクチョウ類が中継地（一部、越冬地）として渡来する折には、それらの農地へ飛来し、農業残渣や生育期間中の小麦を採食する姿が近年通例となっている。十勝地方のうち、十勝川下流域から沿岸部に広がる海跡湖・河跡湖沼群を含めた十勝東部地域におけるガン・ハクチョウ類の主要な構成種は、亜種オオヒシクイ、マガン、シジウカラガン、ハクガン、オオハクチョウであり、ここ10年間における渡来数は概ね2万羽程度が春秋に確認される。それらのうちハクガン、シジウカラガンは北海道へ渡来する個体数の9割以上が本地域を主要な中継地としており、十勝東部地域は国内の希少ガン類の保全を考える上でも重要な地域に位置付けられている。

前述のとおり、十勝地方におけるガン・ハクチョウ類による農作物の採食行動は明らかであるものの農業被害としては十分に調べられていないのが現状である。また、十勝地方におけるガン・ハクチョウ類の生息環境の一部は鳥獣保護区や自治体指定天然記念物によってある程度は環境改変に対する規制の網がかかっている箇所もあるが、周囲を農地に囲まれた河跡湖のようなねぐら環境はそうした規制が存在しない箇所もあり、周辺農家の理解が不可欠である。そうした中、野鳥の会や地元自治体から構成される協議会、地元野鳥愛好団体などは周辺農家とガン・ハクチョウ類の仲介役となり、時にはガン類に対する意識の聞き取りや一般市民向けエコツアーなどを展開しており、地元住民への普及啓発活動などに取り組んでいる。一方、希少ガン類の増加に伴って野鳥愛好家が当地を訪れる機会が増加してきていること自体が、かえって地元住民にとっての迷惑行為に繋がるケースも散見されている。

さらに渡来するガン類の増加に伴い、近年は十勝東部地域を中心として採食地が周辺地域へ分散する傾向が伺える。また、気候変動や周辺農家の営農・作付状況、離農等に伴う採餌環境の減少、都市開発などの複合的な要因によって、ガン・ハクチョウ類の動きは今後も変化していく事が推測され、より多角的な視点でガン・ハクチョウ類と人との関係性を考える必要に迫られるのではないかと考える。